戦災あとさき

福岡市南区　　坂本　明子

昭和１９年、戦局はいよいよ厳しく私達の生活も日増しに窮乏の一途を辿りつつあった。

女学校を卒業した私は暫く洋裁学校へ通っていたが、その学校もやがては閉鎖となり友人達のほとんどは軍需工場へ徴用されて行った。

私も伯父の関係で天神町の岩田屋別館にある食糧営団本部へ勤めることとなった。所属は運輸課。輸送状況は極端に悪く、ただでさえ乏しい食糧は駅に滞貨し、我々の手元に届くのはいつの事やら、全くメドがつかない有様であった。

私は仕事の一環として、マイクに向い、通行中の人々に、「御通行中の皆様、遅配に継ぐ遅配も今日で〇〇日となりました。……」と食糧事情の逼迫を告げ、理解と忍耐とを求める放送を繰返させられた。

どこの課も男手が少なく、方角音痴の私にも、支所回りの出張が命ぜられるようになった。それは荷渡指図書と日通宛の督促状を持っての重大な任務であった。証明書を持ち、列を作って切符を求め、いつ来るか分からぬ列車を待たねばならなかった。時には待ち切れず、レールの上を歩いて行ったこともあった。

私達のお昼休みは、食べ物の事で終止した。殊に、まぼろしとなったお菓子の想い出話は尽きるところを知らなかった。

その頃のお弁当は、わずかばかりの米に、甘藷、馬鈴薯、大豆、大根等を炊き込んだ物で、それよりもっとひどいのは、ひき割り玉蜀黍、高粱、脱脂大豆、ふすま、といった類の、家畜の飼料を混ぜたごはんであった。純粋の白いごはんは、銀シャリといって、それを口にすることは夢のまた夢であった。

欠乏は主食に限らず、塩、醤油、油、砂糖、だしに使う物等々、すべて無い無い尽しで、味のついた美味しい食べ物を口にすることは出来なかった。

幸い我が家は、西公園東側海岸の北湊町だったので、海水を汲み、近くの造船所から、木の屑を拾って釜を炊き、わずかの塩を作った。海に遠い人達も、リュックサックに一升瓶を何本も詰め、塩水を汲んだ。

燃料が無いため、自宅でお風呂を沸かすことができず、少し離れたお風呂屋に行った事がある。正に芋の子を洗うような、すさまじい混雑ぶりで、しかも濁ったお湯は釜が見える程に少なく、再び行く気にもなれなかった。

何度か、警戒警報や空襲警報が鳴り響き、電波妨害の銀色の金属テープがまかれたりしたが、まだ焼夷弾や爆弾のお見舞を受けたことはなかった。少し我々にも油断があったのだろう。そういう矢先、突如、致命的な福岡大空襲を受けた。２０年６月１９日深夜のことである。

すでに、母と弟は海岸沿いの土手に掘られた防空壕に避難し、家に残ったのは、病身の父と

私の二人だった。座敷の真中の畳を上げそこに掘られた壕の中で身をひそめた。

火の手が我が家に迫っていることも知らず、庭の竹の植え込みの間から見える、異様に赤い月を不吉な思いで眺めていた。外を見回りに出た父の絶叫に、はじき出されるように飛び出すと、すでに周辺は火の海と化し私達は着のみ着のままで西公園に向って走った。西公園の山はあちらこちらチロチロと灯が這っていて光雲神社も戦火の中にあった。

隣組の、１組、２組は１軒残らず灰燼に帰し、私達は一団となってこの山での野宿生活に入った。

２、３日後、私と９才の弟は、草ヶ江の伯父の家に身を寄せることとなったが、両親は西公園に残らざるを得なかった。父が隣組長の責任上、皆が親戚や知人を頼って山を出て行ってしまうまで異動証明や転出証明の発行を続けなければならなかったのである。

いよいよ戦災者としての草ヶ江での生活が始まったが、裸同然の私達はすべてに不自由な毎日であった。

当時の電灯はエネルギー不足のためか、蝋燭送電といって、タングステン綿が、赤く、ぶるぶるとふるえるだけで、少しも明るくなかった。小さな木の箱に電流の通った金属板を差込み、水溶きの小麦粉を入れて焼くといったパン焼器なる物が出回ったが、電力不足のため、一度もふくれた事がなかった。

小麦粉があるのは上等で、どんぐりの粉が配給されたことがある。黒くて、苦くて、とても食べられたものではなかった。

水道もチョロチョロしか出ず、洗濯は近くの樋井川で済ませた。

小学校４年生の弟は、裸足で学校に通い、昼食は家に帰って、雑炊だの、さつま藷等の代用食を食べるといった日が続いた。これは戦災者に限らず、皆が平等に味わった可哀相な少年時代であった。

８月１５日、とうとう日本は敗れた。何のための我慢、何のための苦労であったか。空しさと、口惜しさで涙が溢れた。

その日の午後であったろうか、糸島海岸から敵兵が上陸して来るから、女、子供は避難せよとのデマが流れた。半信半疑のまま、近所の親戚の者と私と母と弟の３人は、チャーターしたトラックで当てもないのに吉井方面に逃げた。途中、久留米の連隊の前を通った時、菊の御紋章を取りはずしたり、鉄砲を焼却している兵隊さん達を目撃した。その時の言いようの無い屈辱感は一生忘れることができない。

終戦の年の暮れであったか、珍しく、もち米の特配があった。わずかばかりの、もち米を炊き、すりこぎで、鉄かぶとの中の餅を搗（つ）いた。

しばらく経ってだったろうか、アメリカからラ・ラ物資が送られて来たが、それも十分でなく、食べる方法がわからない物もあった。

不足は食糧だけに止まらず、衣料品の不自由さも一通りではなかった。履いているズボンに穴があいても、それを繕う布が無く、衣料切符があっても店には何一つとして無かった。２４

年秋、長男を出産したが、一番困ったのはおむつであった。戦災者の私にはゆかた１枚無く、闇市で買うより方法がなかった。主人が千代町の闇市から法外に高い、ボロ布同然のオムツを買って来てくれたが、母は「こんな、おしめをさせて可哀相に」と嘆いた事が忘れられない。

私達にどうやら遅い春が訪れたのは、生死不明の兄がシベリアから帰還し、栄養失調からか体調を崩した父が再就職した頃からであったろうか。

１９才で終戦を迎え、この１０月で７０才になる私の、あっという間の５０年間であったが、長い長い戦後でもあった。